観能のタベ

（石川県立能楽堂）

平成二十九年八月十二日（土曜日）午後六時三十分開演

演目解説　（金沢大学人間社会研究域教授　杉山　欣也）

狂言　墨塗（すみぬり）

女はなぜにうそ泣きをしたのでしょう。別れ話が切り出されると、女は鬢水入れを用意して、目に水を塗ります。妾は後で何といたそうと困惑を言葉にしながら、心底悲しむ様子ではありません。そのうそを大名は当事者ゆえに見抜けません。女に距離を置く太郎冠者が見抜いて告げ口しても、大名は女の涙を信じます。二人は互いの顔を見つめ合い、いよいよ心残りが募る場面で大名が驚嘆。うつけを覚ます墨塗り顔は太郎冠者の才覚によります。

能　葵上（あおいのうえ）

光源氏の正妻葵上（出し小袖）は病床を襲う物の怪に悩まされ、その正体を知るために、口寄せの上手、照日の神子（ツレ）が左大臣邸へ招請されます。梓弓に呼び寄せられて現れ出たのは、破れ車に乗り青女房を伴った上臈女性でありました。神子の報告を受けて、大臣（ワキツレ）が霊に名を問いますと、光源氏の愛人で前の東宮妃、六条御息所の怨霊（前シテ）を名乗ります。人の世の無常を観じ、自らの心奥を直視する知性も、葵上への恨みを持て余し、述べるにつれて自制を失った怨霊は、遂には後妻打ちの乱行に及びます。怨霊は葵上を破れ車に乗せて連れ去る勢いです（物着）。事態は切迫し、左大臣邸には横川の小聖（ワキ）が呼ばれて、般若の鬼と化した怨霊と対決します。数珠を揉む行者と打ち杖を手にした鬼女との息をのむ闘争の果てに、読経の声に感応した御息所は退散を宣言します。さすがの悪鬼も心を和らげ、成仏得脱の身となり行く奇跡が起こります。

（金沢大学人間社会研究域教授　西村　聡）

装束附　シテ（六条御息所）　鬘をつけ、鬘帯をしめ、泥眼の面をかける。摺箔を着附に着、縫箔を腰巻にして、腰帯をしめ、上に唐織を壺折に着る。

終了予定　午後八時十分頃